



【上】大聖堂前の朝市。ここを拠点に放射状に商店街がある。

【右】野菜を販売する農家。かぼちゃもさまざまな形状がある。



●金丸弘美

かなまる・ひろみ／食環境ジャーナリスト。1952年生まれ。執筆活動のほか食のアドバイザー事業を手がける。著書に「ゆらしい島のスローライフ」(学研)、「創造的な食育ワークショップ」(岩波書店)、「田舎力 ヒト・夢・カネが集まる5つの法則」(NHK生活人新書)など多数。

8 ドイツ・フライブルグ市 環境先進都市の 街づくり

環境都市の先進地であるドイツのフライブルグ市を訪ねた。同市は人口21万人。都市の中心部に居住環境を据えて人口の流失をふせぎ、電車を団地の中に引き入れ、公共交通を優先。車は時速6km以内。市内への車の乗り入れ制限を行い、カーシェアリングを実施。歩行者と自転車を優先させ、自転車利用は35%。太陽電池、温水器、バイオマス、ゴミからメタンガス利用など、省エネ対策を徹底した街づくりの実践は驚くことばかりだ。

街の景観も素晴らしい。緑も多い。商店街にも人があふれている。観光客かと思つたら、ほとんどが地域の人たちだという。

なかでも街の中心にある大聖堂前

の広場の光景は、もともと象徴的なものだろう。聖堂は1513年に完成したもので現在も使われ、一部が修復中である。聖堂前広場には月曜日から土曜日まで朝市が立つ。日曜日

は休みである。

朝市では近郊の農家が野菜、チーズ、ハム、お茶などの加工品を販売し、広場は買い物客であふれている。スタンド形式でソーセージを焼いてパンに挟んで販売しているところは長蛇の列で、これをランチにする人も多いのだろう。

新鮮に映るのは農家の野菜販売。日本のようにラップでくるんだり、ビニール袋に入れたりというのはまったくない。すべてが量り売りだ。日本ではおおよそ流通にはならないような、小さなジャガイモも、形が不揃いなトマトも、ばらばらで粒になつたぶどうも、平気で売られている。無駄がないし、余計な包装紙のゴミも出ない。周辺にはオープンカフェがずらりと並び、食事をした

り、コーヒーを飲んだりして談笑する人たちがいっぱいである。

市場は戦前からあつたもの。一時中断されていたのだが、1972年に復活したのだという。

広場の市場は、モーターリゼーションが起こつたことで、1955年から65年に駐車場に取って代わられてしまったのだという。ところが、車が多いことが見苦しいということ、68年に復活運動が始まり、72年からふたたび始まった。

その当時、商店街では人が減り始めていた。車を入れないことには商店街に人がこないと猛反対が起こつたという。しかし、市では大学と学生たちの協力を得て、実際はどうなのかを、市場を実際に開いて実証データをとった。その結果、市場があるほうが人が多いことがわかり、再開したのだという。

街の商店がにぎわっている理由を尋ねたら、街のホテルのベッド数、レストランの席、日用品や非日用品を販売する店舗の数も都市計画で決められているのだという。市場原理は採用しないという原則だ。したがって、土地を所有しているからといって勝手にレストランを開くことはできない。席数が多ければ許可がない。600m以上の店舗には大型店規制があり、市議会を通さないと許可されない。コンビニは一切ない。そして商店の営業は朝8時から夜8時まで。日曜は休みと、広場の市場と同じなのであつた。